

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號二第 卷三十二第

行發日一月八年五十正大

論叢

伊太利に於ける農業社會化運動 . . . 教授 法學博士 河田 嗣郎

地方家屋稅の當否 . . . 教授 法學博士 神戸 正雄

生産の概念 . . . 九州帝國大學 教授 文學博士 高田 保馬

動物界の鬭爭 . . . 教授 理學士 川村多實二

時論

軍備縮小會議に就いて . . . 教授 法學博士 末廣 重雄

說苑

羽州庄内農民愁訴騷動 . . . 教授 經濟學士 黑 正 巖

足袋の製造工程 . . . 法學士 本多 芳郎

琉球の史的回顧 . . . 教授 法學博士 山本美越乃

雜錄

我國古代の財政と佛敎 . . . 教授 經濟學博士 木庄榮治郎

間接消費稅の累進稅率 . . . 助教授 法學士 沙見 三郎

クナップ教授逝く . . . 經濟學士 菊田 太郎

法令

勞働爭議調停法・勞働爭議調停法施行令・工場法施行令中改正・工場法施行規則中改正・商事調停法・土地貸賃價格調査法

(禁 轉 載)

生産の概念

高田 保馬

一

年々多量の財が國民經濟の中に持ち來され、それが又年々此經濟に參與する人々によりて享受せられる。例へばこゝに一の大なる湖水あり。その中に無數の川が注いで水を入れる。此入れたる水量はまた湖水より無數の流れによりて放散せられて大海に注ぐ。此湖を國民經濟とすればかの無數の川は之を構成してゐるところの個別經濟に當る。而して不斷に流入し流出するところの水量は生産し享受せらるゝところの財の總量に當るものである。

さて國民經濟の湖水は不斷なる財の流入を要し、この流入あるが故に不斷なる流出をつゞけて、以て成員の生命を維持し得る。この流入そのことが一面より見れば財の生産に外ならぬ。然れどもこれは飽迄比喩的の表現である。私は今まで、生産の常識的意義を前提して此言葉を用ひ來つたが、進みて、その概念を精確ならしめたいと思ふ。

私の生産概念は財の獲得の困難又は獲得に對する障礙を以て中心とする。従ひてまづ當初に此獲得の困難の性質を考へたいと思ふ。

財の有價的獲得は常に或る意味に於ける交換として考へ得られる。此交換の營まるゝ所以は相手が無價を以て財を提供せざるが故である。此相手は或る場合に於て自然であり、他の場合に於て人即ち經濟組織内部に於ける他の經濟主體である。かくて獲得の困難と云ふものが二様に分ちて考へ得られる。一は交換の相手即ち財の提供者である所の自然が獲得者に及ぼす抵抗である、所謂「自然の物惜み」と云ふはこの事を指す。他は即ちかゝる相手たる人が獲得者に及ぼす抵抗である、一面よりすれば彼の敢てする「代償の要求」「對價の要求」である。前者を自然的困難又は自然的抵抗と云ひ、後者を社會的困難又は社會的抵抗と云ふ。所謂獲得のための代償は常に此二者の何れに向ひてか支拂はれる。今、社會的困難の性質より考ふるに、これは二に區分し得られる。一は代表的又は反映的困難にして、他は狹義に於ける社會的困難である。前者は自然的困難を代表する限りの又は反映する限りの社會的困難である、即ち一定の經濟主體甲が自然に對してある代償を提供することにより一定の財を獲得したりとする、他の經濟主體乙が彼より之を獲得せむとする場合には、少くも彼は自ら自然に向ひて拂ひたる代償を要求するであらう、而も此要求は即ち自然的困難(自然が甲に對して加へたる抵抗)を代表したるもの、反映したるものであ

る。勿論第三第四の人が順序に即ち、丙が乙より丁が丙よりこれを獲得することはあり得る、その場合丙が丁に向ひて要求する代償は溯りて考ふるに、やはり甲が遭遇し克服したる自然的困難を代表するものと見るべきである。此の如く考へて來れば、私共がある財の獲得の爲めに支拂ふ犠牲は常に必ず究極の分拆に於て、自然的困難に打克つための代償か、狹義に於ける社會的困難に打克つための代償かの何れかに歸着する。このことをば今例を以て明にする。

一の反物の價格拾圓が次の如き構成部分から成るとしよう。

棉花	紡績費用	紡績利潤	機械費用	機械利潤	小賣利潤	小賣價格
	$2^M + 3^M$		$+ 2^M$			
		$+ 1^M$		$+ 1^M$		
						} = 10^M { \dots 7^M (費用) \dots 3^M (利潤) }

このうち利潤參圓はすべて社會的困難に打ち克つための費用である。而して、殘部七圓は大體自然的困難に打克つための費用と考へられ得る。然れども、これもなほ究極までの分拆を要すると思ふ。例へば紡績の費用參圓の中、職工の勞銀壹圓、機械の磨損壹圓原料の消耗壹圓なりとする。後の貳圓はまた分れて、之を供給したる生産者及び商人の利潤壹圓と勞働の費用壹圓とに分れるとする。その時は參圓の中貳圓だけが自然的困難に對する費用であり、壹圓はまた社會的困難に向ひて支拂はれてゐる。機械の費用に就いても亦かゝる分拆を要するであらう。之を一般的に云

ひ表はせば次の如きものとなる。

自然の上に費用 n_1 を加へて獲得せらるゝ財を W_1 とする、それは n_1 に利潤 s_1 を附加して賣られるとする。これに加工せられたる W_2 は加工の費用 n_2 に利潤 s_2 を添加して賣られるであらう、順次此の如くにして、最終の享樂財 W_z が賣られるとする。費用 n_1, n_2, \dots 等は勞働の費用と資本財の費用とを含むけれども、後者が中間財として結局勞働の費用を以て獲得せられたるものと見らるゝが故に、假にこれをも勞働の費用として換算する。然る時は最終の享樂財 W_z の獲得に要する一切の費用は自然的困難に對する代償 n_1, n_2, \dots, n_z と社會的困難に對する代償 $s_1, s_2, s_3, \dots, s_z$ との二部類に分たれ得る。

$$(n_1 + s_1) = W_1;$$

$$W_1 + (n_2 + s_2) = W_2;$$

$$W_2 + (n_3 + s_3) = W_3; \dots$$

$$\dots W_{z-1} + (n_z + s_z) = W_z$$

$$W_z = (n_1 + n_2 + \dots + n_z) + (s_1 + s_2 + \dots + s_z)$$

而してかゝる考へ方はこれをあらゆる種類の財の獲得過程にあてはめることが出来る。かくて、社會のすべての財について見るに、これが獲得の困難と云ふものは究極に於て、自然的ならざれば社會的である。

而して生産と云ふはこの自然的なる獲得困難を打ちやぶる事である。社會的なる獲得困難の克服はたゞ全然交換の過程の中に於てのみ營まれ、生産の過程の中には毫も行はるゝ所がない。之に反して、自然的困難の克服は専ら生産過程に於て營まれ、交換の過程の中に入る餘地がない。これは何等論證し得ることではなく、事實そのもの、關係の記述に外ならぬ。

此の如く生産は専ら人と自然との交渉に存する、人が物惜しみする自然に對し或る犠牲を捧げて、その手から財を獲得する所に存する。自然に對して支拂はる犠牲は常に勞働である。勿論勞働と共に生産手段例へば機械原料も亦支拂はれねばならぬ。けれども、それは前表に於ける W_1, W_2, W_3 等に當る、それ自體が自然に勞働を加ふることによりて成立したるものである。かるが故に究極自然に對する代償は勞働のみと云はれ得る。それ故に $W_0 + n_1, W_1 + n_2, W_2 + n_3, \dots$ と云ふが如く、ある原料たる財に自然克服の費用 n_1, n_2, \dots を加ふることのみが生産にして s_1, s_2, \dots を加ふことは全然これに與らぬ。勿論此勞働そのものが何によりて生産せられその價值が何によりて決定せられるかは全然別の問題である。

自然的困難に打ち克つと云ふ意味の生産は物財を創造することである。云ふまでもなく、人は物質そのものを増減變革することは出来ぬ、そこで物財の創造と云ふもたゞ、物質の状態の上にある變化を及ぼすことに止まる。此變化と云ふは重に二の方面に於て存する。一は物質の形態に

於ける干涉(ある新なる形態を興へること又は消極的に、ある變化の自然に生ぜむとするのを食ひ止めて一定の形態を維持せしむること)にして、他はその位置に於ける干涉である。即ち物質の位置の上にある變化を意識的に興へることである(この位置を今、たゞ空間的の意味にのみ解して置く)。この物質状態の上に加ふる干涉が生産であり得る爲には、財の獲得の目的に役立つなければならぬ。このことから三の結論が生ずる。第一。技術的生産は必ずしも經濟的意義に於ける生産でないこと。技術と云ふのはたゞ一定の興へられたる條件の下にある事象を實現せしむること(又はその方法のみを抽象して意味せしめ得る)である。従ひて物の所有とは何等必然の聯絡がない。技術の目的は所有の實現即ち獲得にあらすしてたゞ實現にある。故に(a)獲得を必要とするものを作り上げること、その必要なものを作り上げること共に等しく技術である。前者の場合にありても技術は獲得そのことではなく、物の一定状態を實現せしむること、そのことである。(b)費用が之によりて獲得せらるゝものよりも大なることの明白なる場合には獲得が斷念せられる、従ひてそこには技術的産出あれども經濟的生産はない。要するに、技術は(財の)實現の方面からの概念であり、生産はその有價的獲得の方面からの概念である。二者は其範圍に於て相合一せず、此双方の性質を兼ね其ふる同一の事實についてもその見る方面を異にする。第二。生産は一の經濟行爲である。従つてそれは勿論ある程度まで經濟原則に従ひ、常に費用よりも效

果の大ならむことを求める。然れども、事實に於て到達したる結果より見れば、これと反對のこともあり得よう。それは失敗せる生産である。失敗してはゐるけれども、有價的獲得の行爲である以上、經濟的なる生産以外のものではない。一企業の生産が如何に多大の損失を招くにしても生産たるに變りはない。第三。生産はたゞ獲得に對する自然的困難の克服に存する。然れどもこれは生産の消極的方面とも見得られるであらう。此生産によりて新しき形態の物財が創造せられるとは必ずしも云ひ得ないにしても、兎にかく新なるものが獲得せられる。それは或る場合には新なる效用でありある場合には新なる價格である。これらに着眼することによりて種々なる生産概念が成立する。私は生産をこれらの積極的なる方面より見ず、消極的なる方面から見ることによりてのみ、一義的概念決定をどげうると信じてゐる。

此積極的方面に着眼する時は、生産概念の價格説又は效用説が成立する。それらに従へば、生産とは新なる效用を作り出すことである、又は生産とは新なる價格を生み出す事である。先づ效用説の吟味より始める。なるほど人は何等新なる物質を増加することはできない、そして、なし得る所のすべては物質の形態と位置とを變化し得るだけである。そこで效用説は新しく作り出さるゝものは此物質の效用だけであると云ふ。私は此見解を全然當らずと云ふのではない。例へば個人が何等交換を目あてにせず、自給のために生産する場合、又は共產主義の經濟の場合には明

白にこのことがあてはまると思ふ。然れども、少くも今日の資本家的經濟については當らざる事が多い。例へば、貧民階級のためには生命維持の資料である米麥が十分ならざる場合と雖も、豪富を有する人々の需要急なる時にはその米麥を材料として酒、菓子を作られる。そしてそれは明白に生産であると考へられてゐる。何人もパンを食べざる間は菓子を食ふべからずと云ふのはたゞ共產經濟のことである。酒菓子の價格の總高はもとより原料たる米麥の價格の總高よりも大きい、併しながら、多數の貧民の食料としての効用が飽食暖衣の人の酒菓子としての効用よりも少なりと云ふことを何人が斷定し得るか。元來、効用と云ふものは所有者を離れて考へ得べからざる概念である、所有者との關係を切り離して財の効用の増加が一に生産と云ふ過程即ち獲得の自然的困難の除却に伴ふと見るのは到底許されざる考へ方である。然れども同様なる考へ方は價格説についてもあてはまると思ふ。生産概念に關する價格説は次の如きものである。生産とは市場に於て更に高き價格を支拂はるゝやう物質の上に變化を加ふることである。かく云はねばならぬ理由は、生産のみによりてはまだ價格と云ふ對價が得られない、得らるゝものは價格の支拂はれうるやうの物質状態を生ずることであると云ふ點に存する。然れども、私はかう思ふ。價格の増加と云ふことは決して生産に特有なることではない。財の數量を寧ろ減少し(ある品物を海中に投棄するが如き)、又はその生産を停止することが價格増加の最も確實なる方法である場合も多

い、今日の獨占利潤の多くは此の如くにして得られるものと思はれる。従ひて、高き價格を支持はるゝやうに物質に變化を加ふること、云ふのは生産よりも餘りに廣き範圍を示してゐると云はざるを得ない。なるほど今日の資本家的經濟にありては價格が追求の唯一目標であり、従つて生産も亦「より高き價格」を目標として營まれる。しかしながら、それはたゞ獲得の自然的困難を除却する道行として自然の上に變化を加ふるのみ、然らざる道行によりて自然に變化を加へても、それは價格を高むる結果を伴ふにせよ、生産ではない。

かくの如くに見來れば、生産の生産たる所以は飽まで獲得の自然的困難を除却するに存する。たゞ獲得が何を目あてにするかに従ひて、此生産により或は新しき效用が作り出され、又は價格の増加が可能にせられる。目ざす所のものゝ何であるかは一に、經濟組織の如何によりて決定せられるものと思ふ。貨幣經濟の場合にありては目ざさるゝ所、従ひて生産によりて増加せらるゝ見込あるものは價格である、貨幣前の經濟、又は共產經濟にありてはそれが效用であると思ふ。見込ならぬ。思ふに、生産を取て行ふと否とは一に自然に向ひて投ずる費用と之によりて得らるゝ効果との比較によりて決せられる。然るに、貨幣前經濟にありては、費用と効果と云ふものもたゞ失はるゝ效用と獲得せらるゝ效用とに外ならぬ、従ひて新に増加する效用を獲得せむが爲にのみ生産が行はれると見るべきである。貨幣經濟の場合にありては、比較せらるゝものは共に貨

幣額である。従ひて價格の増加をめじるしどしてのみ生産が行はれる。此事情から、經濟組織の如何によりて、生産が作り出すものは新なる效用であることもあり價格であることもあり、一概に云ひ難きのみならず、これらのものが作り出されるにしても、作り出す道行が生産であるためには、自然的困難の除却たるを要する。かくて生産をたゞその積極的方面によりて定義することは不可能なるのみならず誤謬に陥る。

二

私は生産の概念に關する一二の異見を考へて見たいと思ふ。

第一に效用を作り出すことが生産であると云ふ見方を檢する。例へば、マアシャルは云ふ、人は精神界に於てこそ新なる觀念を作り得るけれども、物質界に於ては何物を作り得ない、生産と云ふことも畢竟新なる物質を作るのではなくして、效用を作り出すと云ふに止まると。私は此見方が大體に於ては誤らざるを知る。然れども仔細に考へ來れば效用の創造が必ずしも生産と同一ではない。今日の貨幣經濟に於ける生産は多數の無産者にとりて效用多き財を生産財として、有産者の消費する奢侈的財を作り上げる。米は菓子となり酒となり、麥は麥酒となるが如し。この事既述の通りである。而も、これは多數の人々から多大の效用を奪つて、少數の人々に比較的小

なる效用を興ふること、明であると思ふ。これ生産が必ずしも、效用をつくり出すことを意味せざる一例である。加之、效用の作り出されたりや否やは如何にして認め得らるゝか。それは一定の財が社會全體に對して有する效用をば、これが生産に費されたる財の社會全體に對して有する效用と比較して、その増加したりと思はるゝ時にのみ生産が行はれたりと思ふべきであるか。然れども、一財の社會全體に對して有する效用は如何にして認識し得らるゝか。一財の效用はその享受者との關係を離れては考へ得られぬと思ふ。而もある財が何人によりて享受せらるべきやば多くは明確ではない、従ひてそれが社會全體に對して有する效用と云ふものが、享受者の見積る效用の合計（これが考へうるとしても）であると思へても、此の如きものは到底認め得べからざることである。進みて考ふる時効用生産説の立場からは、單なる財の交換も亦生産であると思ふこととなる。米と麥とを甲と乙とが交換する時、彼等はこれによりて所有する效用を増加し得るからである。茲に於てか、これらの非難に答ふるものとして効用に代ふに潜在効用を以てする見方があり得る。1) 『生産とは外物として具體化せられたる潜在効用を人間の勞働力によりて作り出すことである』。而も此潜在効用と効用との區分線はいづこに存するか。若し、所謂現實効用即ち享受に於て現はれるものと區別せむとする爲でありとすれば、其所謂現實効用と云ふものは現實の満足又は享樂そのものにして効用に非ず、所謂潜在効用がこれ効用そのものである。普通の意

1) 那須博士經濟政策學原理九〇——九二頁

味の効用はその所有者の欲望をみたしうる見込みの方である。従ひてそれが効用生産説から異なるものであるためには、それは物能の生産これ生産であると説く外はない。然れども物能の生産が生産であると云ふときには、物質の如何なる有意的變容もすべて生産なりと云ふ結論に陥らざるを恐る。私が那須博士の精緻なる考察に従ひ得ざるは、その生産の見解が獲得の困難に着目してないことに存する。

價格又は交換價値の増加と、自然に及ぼす干渉との二を結合せしめて、これを生産の本質と見る考へ方がある。所謂生産を價格の生産と見るものである。然れども、交換經濟以外に於ける生産が價格の生産と考へられざることは云ふまでもない。價格の騰貴を求めて既に存在する財を廢棄するが如きをも生産と見るは餘りに偏したる考へ方と云はなければならぬ。交換經濟内部にありても、自然的障府を排除して使用價値を高めながら、それが一般に何等の貨幣價値の増加となりて表現せられざるものがある。例へば家庭に於ける食物の調理の如きこれである。然れども、これらをも亦生産の範圍外に置くのは如何かと思ふ。勿論それが普通に消費に屬すと考へらるゝことはあるにしても、概念構成は決して傳統にのみ従ふべきものではあるまい。たゞ貨幣經濟の組織にありては、獲得せらるゝ財と費用との比較が常にその價格によりて計量比較せらるゝが故に、生産によりて目ざゝるゝ所は價格の増加にある。然れども、生産の道行に於て到達せらるゝ

ものは、交換に於けると異なり、價格の増加そのことではなく、寧ろ、見つもられたる價格の増加即ち財の貨幣價値の増加である、従ひて現實に價格の増加を見るや否やは財が交換の過程を通過したる上でなければならぬ。

生産に積極及び消極の二の方面の存することは前に述べたる所によりて明である。而して、その積極的方面に重きを置いて考ふる限り、精確の生産觀念を得がたい。このことは、効用に着目するも價格に着目するも同様であるが更に進みて社會全體の富に着目するも亦同様である。河上博士によれば生産とは『人間が外界の物體に自然的の變化を施すことにより、社會全體の富の總量を増加することである』²⁾富とは『人間に取つて有用であり且つ稀少性を具へてゐる外界の物體又は外界の物體と同一視せらるゝものである』。然れども、これに關して私は思ふ。富の總量の増加とは何を意味するか。勿論、經濟財の重量を云ふのではなからう、然らばその効用によりて計るか、その價格の總計によりて計らなければならぬであらう。而も此二説の何れをとるも成立しがたきこと前述の如くである。特にその富の見解よりすれば、富の富たる所以はその効用に存する如くである。然らば進みて考へる。今年有産者の爲に生産したる奢侈品の一部を廢して、明年その代りに、價格に於て遙に小なる、しかし勞働者に取りては極めて必要なる財を生産する。その時、富の大きさに増加あり、生産に増進ありと云ひ得べきや。若し、同一の勞働の投せられたる

2) 大正十二年度經濟原論講義プリント八、一〇頁

限り生産の増減なしとせらるゝと假定すれば、それは既に富の總量の増加を生産の中心と見ず、寧ろ生産の消極的方面をその中心と見らるゝものである。又、生産に増進ありとするならば、それは一般の見方と全く背けるものであらうと思ふ。

以上の私の考へ方は、効用生産説に關する限り、限界効用遞減の法則の上に立つものである。此法則の支配する限り、個人についてはゴッセンの第二法則が認められるのみならず(限界効用均等の法則)、個人間の關係については、分配の均等に近きほど一定の財の社會的効用は極大なりと云ふ立場が許される筈である。貨幣の與ふる利益に關する所のダニエル、ベルヌイイの假設と云ふものを考へる。『任意に小なる財産増加より生ずる利益即ちその精神的價値は増加の大きに正比例し、既に有する所の財産の大きに反比例する』。一人の現財産を x とし増加量を dx とすれば此増加の精神的價値 dy は次の如し。

$$dy = k \frac{dx}{x}$$

k は個人の事情によりて定まる常數である。財産が a より x に増加したりとせば最後までの増加の價値は次の如し。³⁾

$$y = k \int_a^x \frac{dx}{x} = k \cdot \ln \frac{x}{a}$$

各成員のうち、特別の精神的構成を有するものを認めざる限り、所有貨幣量の相近きほど、享受せらるゝ、精神的價値の總體は大なる筈である。此貨幣に關する立論は容易にまた財そのもの、上に移し得られざる道理はない。かくて下層階級によりて消費財を奪ひ去りて上級の奢侈品にまわす所の生産行爲は効用を増加せしめずして之を減少せしむるものなりと考へ得る。

三

最後に私は私見に對する多少の辯護を記しつけて置きたいと思ふ。

私の生産概念に就いて次のやうな非難を加へる人があるかと思ふ。獲得の自然的困難の除却と云ふことはたゞ一の技術的のものにすぎず、經濟的範疇に屬することからではない。自然的困難を除くと云ふのはたゞ自然と人との間に於ける相互作用を意味するだけに止まるのではないか、マルクスの生産概念からするならば、その所謂勞働過程のみを切り離して、即ち生産の抽象的な一側面を以て直ちにこれ生産であるとするのではないか。

私は此加へられさうな非難に答へるまへに、生産そのものを以て技術的なりと云ふ主張を吟味して見たいと思ふ。私は技術と云ふことの本質を以て、前述の如く専ら『ある條件の下に於けるある状態の實現への方法』に存すると見る。技術は状態實現への道行と云ふより以上をも、以下

をも意味することはない。而して經濟とは何ぞやと云ふに、それは獲得を中心とする、それは云はゞ無條件有償的 (unbedingt-entgeltlich) とでも云ひ表はすべきか、一定の代償をさへ拂へば獲得の主體のだけであるを問はず獲得せられることを示さむとするのである、單に有償的と云ふことの不精確さを修正するつもりにてかく云ふ) 獲得の行爲に外ならぬ。かくてすべての經濟又は經濟行爲はこれを獲得と云ふ状態の實現への方法として見來れば技術ならざるものはない。然るに拘はらず、人々が經濟と技術とを對立せしめるのは經濟であり又技術であるものと經濟ならず技術なるものを對立せしめるに外ならぬと思ふ。然らば生産は技術にして經濟にあらずと云ふのは、生産が技術とのみ見らるべくして如何なる意味に於ても經濟と見らるべきにあらずと云ふに存する。然れども謂ふに、何人かの獲得を意味せざる生産と云ふことは考へ得られない、勿論生産の行爲について、此何人かの獲得と云ふことを離れて、人力と自然との交渉のみを切り離し、それだけを思ひ浮べることが不可能ではない。而してこれを單なる技術と考へることもまた不可能なりとしない。併しながらこの思ひ浮べたるものを生産なりと云ふならばそれは例へば映寫室に於ける活動寫眞機械の運轉のみを捉へてそれが活動寫眞であると云ふ如く、全體の部分を任意に切り離してそれを全體であると云ふものである。生産は勿論人力と自然との交渉を含む、併しながら、それは狂人が白刃をふり廻して手當り次第に樹木をなぎたふす所の交渉と異なる點は、

かゝる交渉が特殊の全體的なもの、一部分であることに存する。それは財の有償的獲得の方法としての對自然的交渉である。従つて、此人力と自然との交渉は中に有償的獲得と云ふ「思はれたる意味」を含むてゐる。これが即ち生産をして經濟的ならしめる所以である、而して單なる技術たらしめざる所以である。若し更に進みて、社會的と云ふ要素を含ますして經濟はない、經濟は必然的に社會的であると云ふ立場からして、個人的でもありうべき生産を經濟外的であると主張するならば、それはもはや論證の問題ではない、たゞ經濟の本質を直觀せらるべしと云ふ外はない。

議論は更に進む。獲得の自然的困難の除却と云ふ意味の生産もまた經濟外的のものに過ぎざるか。なるほど、これは具體的な生産過程の消極的方面を述べたるものではある、併しながら、それは單に『人と自然との間の過程』『人が彼自身の行爲によりて自然との其材料交換を媒介し規整し統制する所の一過程』⁴⁾に止まるものではない。生産過程の積極的方面即ち財の獲得と云ふ方面は既にかの消極的方面の叙述そのもの、中に包含せられてゐる。有償的獲得の意味を伴へる行爲の消極的一面としての困難除却がこゝに描き出されてゐる。何等から状態の實現のための困難除却に非ず、獲得のための困難除却である。従つて、たゞ消極的方面のみこそ浮び上らされてはゐるけれども、描かれたるものは、效用の爲めに又は價格のために獲得せむとして、これが爲の自然的困難が除却せらるゝ事實である。例へば、浮彫にせられたる部分はマドンナの前面であ

4) Kapital, Bd I. (8) S. 140.

るけれども背面の姿も亦包含せられ、指示せられてゐる。此意味に於て、私は前に述べたる生産概念が技術的のものに過ぎず、経済的種類に属しないと云ふ非難を斥け得ると思ふ。

要するに、生産は消極的積極的の二方面を有する。その消極的方面に於て云へば、獲得の自然的困難の除却である。その積極的方面に於て云へば獲得に値するもの、獲得である。獲得に値するものは或る場合に於て效用であり、他の場合に於て價格であり、更に進みては餘剰の價格即ち利潤である。これらの區別は經濟組織が自給經濟又は共產經濟であるか單純なる交換經濟であるか、又は資本家的經濟であるかに關する。種々なる生産の差別點は専ら此積極的方面の側に在り、消極的方面の側に於ては單一の色彩即ち困難の除却と云ふことがあるだけである。

此點に關してマルクスの生産概念を考へ合せるのは頗る興味ある事柄である。マルクスの生産概念には二のものが含まれる。一は社會的物質的生命の生産と云ふ概念であり、他は商品生産の概念である。而して今先づ考へ合せむとするものは後者に外ならぬ。

生産と云へばそれは常に『一定の社會的發達段階に於ける生産』である。従つて商品生産が今問題とせられる譯である。然らば商品の生産とは何ぞや、『勞働過程と價值形成過程の統一として生産過程は商品の生産過程である、勞働過程と價值増殖過程の統一としてそれは商品生産の資本家的形態である。』従つて、商品生産と云ふことは二の方面をもつ、一は勞働過程にして他方は價值

5) Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie. herausgeg. von Kautsky, 1909. Einleitung zu einer Kritik usw. S. XV (N. Zt. XXI Jahrgang I. S. 710.)

6) Kapital; Bd I. S. 160.

形成過程である。然らば勞働過程と云ふのは何であるか。それは人と自然との間の過程であり、人と自然との材料交換の媒介過程である。身體に屬する自然力をば、自然質料を有用なる形に於て自己のものとなす (Ergänze) ために活動せしめる。かくして作り出されるものは使用價值である、「形態の變化によりて人間欲望に適ふやうにせられたる自然質料」である。此等の點を併せ考ふるときは、所謂勞働過程は單に自然と人力との交渉をさすのみならず、之によりて使用價值の獲得せらるゝ道行をも併せ意味する。これと商品生産過程とを比較する。商品は使用價值と(交換)價值との統一であるが故に、その生産もまた此二者を作り上げる過程、即ち勞働過程と價值形成過程との統一でなくてはならぬ。かくて商品の生産にありては此勞働過程がその一面をなすと云ふに止まる。然れども生産一般と云ふものは考へられないか、そして、勞働過程が此生産一般の特徴をなすとは見得られないのであるか。

商品生産から離れて一般的に考へられたる生産とは何であるか。すべての生産は一定の社會形態内に於て、又その助けによりて、個人の側からする自然の獲得である。⁷⁾ 又云ふ、たゞ此社會的關係の内部に於てのみ、(人々の)自然に對する作用は生じ生産は生ずる。⁸⁾ 私思ふに此自然に對する作用は即ち勞働過程であるがそれが即ち生産ではないか、更に進みて云へば、商品生産ならざる生産にありては、商品の商品たる所以の特徴たる價值の形成と云ふことは、少くとも考ふるを

7) ibid. S. 30.

8) ibid. S. 149.

9) Zur Einleitung usw. S. XVIII.

10) Lohnarbeit u. Kapital, S. 25.

要しないではないか。生産として残る所はたゞ勞働過程そのものであるとは考へ得られないか。

勞働過程と生産過程とを區別せむとする見解として注目すべきものは次の通りである。勞働過程を以てたゞ抽象的に考へられたる自然對人力の交渉にありとなす。而も、それは何等必然的に社會的關係を意味しない、勞働が事實に營まる、際、これを切り離しがたき社會的關係と云ふ要素と結びつくところに、生産がある。『生産に於て人はたゞに自然に對して作用するに止まらず、人間相互間に作用する、彼等は一定の様式に於て共同に作用しまた彼等の活動を相互に交換してのみ生産する。生産せむがためには彼等は相互に一定の關係に入り込む』具體的生產過程即ち社會的生產過程に於ける抽象的一方面(人と自然との相互作用)のみを見るとき勞働過程が認められると云ふことになる。

さて按ずるに、生産と社會的關係との結び付きは必然的にして、勞働と社會的關係とは切り離されて考へらるべきであるか。よし然りとするも、生産の他の一面即ち價值形成過程は社會的關係を不可離に結び付けるものであるか。勞働過程が生産過程たりうるが爲には何もの、加はるを要するか。

第一。生産と社會的關係との結合は事實的偶然的思想と思ふ。マルクスの立場からは云ふ。「個人が生産する、生産するために一定の關係に入り込む。此關係に入り込まずして生産するこ

とは歴史上の事實として認められない。時代を測るにつれて個人の社會に吸收せらるゝ程度は高く、スミス、リカルドの孤立漁夫は十八世紀の平凡なる構想に屬する¹¹⁾。而も生産が必然に社會的であると云ふ論證は何等試みられてゐない。説かれたところは、生産が事實上社會内部に於てのみ行はれると云ふことに過ぎぬ。

第二。勞働と社會的關係との結合については、社會を離れて生産なく又生産のある所常に勞働過程が其中に含まれてゐる以上、社會を離れて勞働はないと云ひ得べきである。従ひて勞働過程と社會的關係との結び付きは生産と社會的關係との結び付きと等しく密接である。併しながら、勞働にありては社會との結合より離れて考ふる故に生産でない¹²⁾と云ふ議論は成立しまい。生産が社會的關係と結びついてのみ存立するが故に常に社會的生产であるならば、社會的關係と結びつかざるものとして勞働は生産であるべきではないか、社會的生产の概念はそれ自體單なる生産の概念を豫想するものであると思ふ。

第三。私も既に述べたるが如く、勞働過程の概念はある程度の抽象性を有する。それは常に人力と自然との交渉として考へられてゐる。これと生産概念との距離はある主體による財の獲得にある。然れども繰り返してのべたるが如く、此獲得又は占有の要素は對自然的相互作用と云ふ概念の中に既に包含せられたるものであり、たゞ明に之を掲げ出さずと云ふに止まる。勞働過程は資本家が買入れたる物の間の過程である、此過程の生産物が彼に屬するは酒倉に於て出來上れる酒の彼に屬すると同じい¹²⁾。かく云ひ得られるならば、勞働は常に何人かの勞働である以上、勞働

11) Zur Einleitung usw. S. XIII.
12) Kapital Bd I. 8 S. 148.

過程の生産物が何人かによりて獲得せらるゝに至ることは勞働過程そのもの、概念の中に内含せられてある。かくて勞働過程が一般生産過程であると推論しうると思ふ。要するに、以上の解釋は、勞働過程と生産過程との區別をたゞ社會的關係の參加する¹³⁾と否との差異に求めむとする立場に對して反對したるに過ぎぬ。マルクスの見解に對する此解釋の當ると當らざるは私見そのもの、當否と相關する所はない。

第四。商品生産過程の構成要素として價值形成過程と云ふものが考へられる。これも、社會的關係と同義に解釋しうべきや。私はこれをもまた、勞働過程の一面と見るべきではないかと信ずる。『同一の勞働過程が價值形成過程にありては、其數量的方面から現はれる』。價值の測定見積には社會的平均勞働と云ふもの、考へらるゝを要し、從つて社會的關係を離れまい。併しながら、價值形成は社會内部に於て營まるゝにしても、それは、たゞ一の勞働過程として營まれる。勞働過程の一側面が價值形成過程として考へられる。従つて、勞働過程が社會的關係から切り離して考へられてあるならば價值形成過程そのものも亦此關係から切り離して考へられてあるはずである。

マルクスの社會の物質的生命的生産と云ふ概念に至りては甚だ廣義のものにして、普通に云ふ生産の外交換分配をも含み、更に進みては生産關係分配關係そのもの、生産をも、又方面をかへて云へば、社會の全物質的需要の充足をも包括してゐる。これは私の今述べたる生産概念と餘りに距離を有する事柄であると信するが故に敢て立入らず(大正十五年七、七、午後四時)。

13) Kapital Bd. I. S. 158

14) Cunow, Marxsche Gesellschaftslehre, Bd II. S. 149 ff.